静中・静高関東同窓会
会報

静中・静高関東同窓会
会報　第32号
平成4年1月24日発行
編集人　上杉重吉

295名が集まって、同期会を兼ねた

第17回 平成3年度 総会・懇親会

ふるさとの名産品に舌つづみを打つ！

学生も74名、交歓の輪が広がる！

十七回めを迎えた総会は、平成三年六月二十一日（金）の午後六時半から、神田駿河台の新日本証券大食堂において盛大に開催された。

まず、高らかに校歌を斉唱し、大石巌関東同窓会長（53期）が「同窓生の友誼を厚く、同窓会の運営その他に、ご注文や提言を積極的にして頂き、ますます同窓会の充実強化を図ろう」と挨拶された。

ついで、北川巻平同窓会副会長（48期）と石田徳行静高校長にお言葉を頂いたが、両氏のほか、静岡から臼井茂（44期）土屋詮二（45期）遠藤久彌（45期）、同窓会幹事の甲木怜（79期）船川誠（84期）など、十三名の方々が参加してくださった。

議事は、平成二年度事業報告と会計及び監査報告、そして平成三年度事業計画と予算計画が提案され、それぞれが可決、承認された。

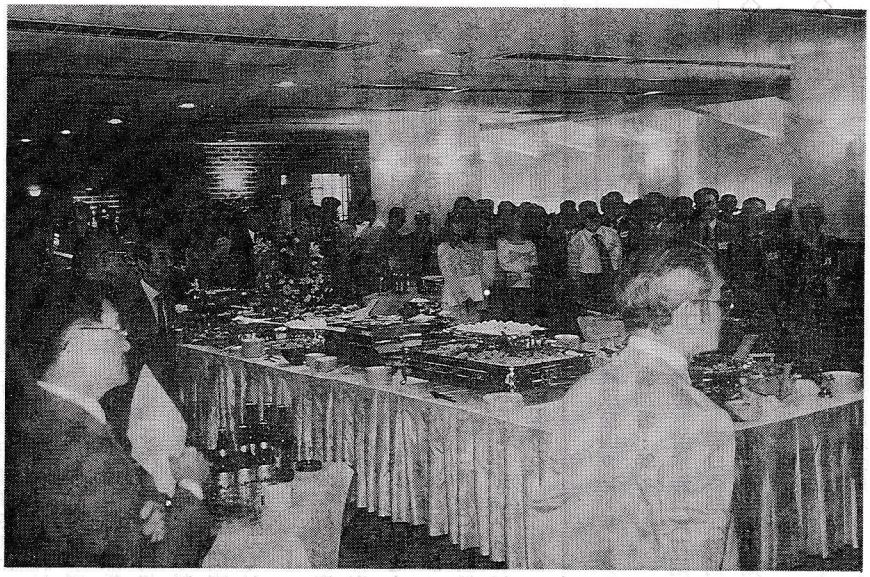
次に関東同窓会発足以来の十六年余、事務局の仕事に献身してくださった㈱大雄の山田政光さんに記念品を贈り感謝の意を表した。本当に縁の下の役割を果してくれた山田さん、同窓生と思った人も少なくなかったことを付記したい。

懇親会は、最年長の岩波信平顧問（42期）の音頭で、高らかに乾杯して開会。

例年通り、ふるさと静岡の郷土色を盛りこんだ料理なども花を添えて、先輩・後輩の交歓の輪が広がり、会場は熱気に溢れていく……。

若い大学生が同期会を兼ねた形で年々参加者が増えるのも喜ばしい。今回、学生は七十四名、これも関東同窓会ならではのことだろう。

宴の締めくくりは、味岡副会長（70期）の音頭で「岳南健児一千の……」を三百名が大合唱。以後三々五々の散会となり、盛会裡に閉幕した。（60期　上杉重吉記）



総会当日配布した「会報」31号はお読みになりましたか？　ご提言をぜひ！

平成2年度　静中・静高関東同窓会決算書

（H2.4.1～H3.3.31）

Ⅰ 収　入	
元年度繰越金	211,702円
元年度会費（30名）	64,000円
2年度会費（976名）	2,096,000円
広告料	260,000円
預金利息	3,974円
総会収入	82,117円
特別金の運用益	1,000,000円
計	3,717,793円
Ⅱ 支　出	
会報	494,500円
郵送費	809,540円
印刷費	59,600円
人件費（アルバイト）	100,000円
消耗品費	98,240円
事務用品費	978円
交際費	70,000円
雑費	7,050円
会報編集費	50,000円
懇親会（ゴルフ）	50,000円
会合補助費	560,300円
消費税	10,710円
特別金繰入れ	300,000円
計	2,610,918円
Ⅲ 残　高（次年度繰越）	1,106,875円
Ⅳ 特別金	2,000,000円
特別入金（本部より）	3,000,000円
計	5,000,000円

上記監査の結果適正であることを認めます。

平成3年4月22日

監事　後藤弘枝　松野敦子

平成3年度　事業計画

1. 総　会　年1回
2. 顧問会　年1～2回
3. 幹事会　年5回位
   顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。
4. 会報の発行　年2回（6月・12月発行）
5. 懇親会　ゴルフ大会（年2回）
   釣り大会、ハイキング大会（年1回）等

平成3年度　静中・静高関東同窓会予算

（H3.4.1～H4.3.31）

Ⅰ 収　入	
繰越金	1,106,875円
年会費 2,000円×1,000人	2,000,000円
広告収入	260,000円
助成金	700,000円
計	4,066,875円
Ⅱ 支　出	
会報発行費	500,000円
郵送費	820,000円
消耗品費	100,000円
印刷費	150,000円
人件費	100,000円
事務用品費	5,000円
会合補助費	600,000円
交際費	60,000円
交通費	30,000円
会報編集費	100,000円
懇親会	50,000円
予備費	1,501,875円
計	4,066,875円

ご苦労さまでした　山田政光さん！

「山田さんは、何期の卒業？」「誰が山田さんと同期ですか」等々と質問されるほど、関東同窓会のため働いてくださった山田さん。

母校百年祭を前に関東同窓会第一回総会が開催されたのは、昭和五十三年六月。それ以前の準備段階から、奥野孝副会長が社長の㈱大雄で総務課勤務だった山田さんは、事務局担当として、総務・経理面から雑事までお骨折りくださり、関東支部の充実・発展にご尽力くださった。

平成三年総会の折、同窓会から記念品を贈り、また特別会員に推挙されたが、今後とも同窓会のためにご後援をお願いするとともに、ご健勝にて社業に精励されることを心からお祈りする次第である。

その後の同窓会活動

（平成3年6月～11月）

◇第17回総会
6月21日（金）　〈別掲〉

◇幹事会
8月27日（火）18時30分～
新日本証券地下一階食堂
出席者…40名
・総会報告
・会報31号の発送依頼　ほか

◇第4回卯高会ゴルフ会
10月22日（火）
武蔵松山カントリークラブ
参加者…30名
優勝　清水雅尚（77期）
2位　溝口淑郎（67期）
3位　宮代省一（70期）

◇同窓会合同役員会
10月26日（土）14時～
静高同窓会館
。大石会長・荒谷副会長等出席

◇同窓会平成3年度定時総会
11月2日（土）14時～
クーポール会館
。月見里顧問・奥沢副会長・上杉副会長等出席

スクール・アイデンティティを考える

静高の場合

静岡高等学校長
石田徳行

（一）

再度執筆の機会を与えていただき恐縮に存じます。今回は、教育の個性化など一連の教育改革で話題になっているスクール・アイデンティティについて、考えてみたいと思います。

静高のスクール・アイデンティティの原点は、なんといっても校訓「卬高」にあります。高きを仰ぎ、自らを高めることは、人類普遍の崇高な理想です。しかもそこには、たとえば「暮しは低く、思いは高く」（ワーズワース）、「天に輝く星とわが内なる道徳律」（カント）など先哲の理念に通ずる情熱とロマンがあります。生徒諸君が、校訓「卬高」を向上のための精神的支柱として把え、同時に、この精神的営みを後輩に正しく継承するという真摯な行為こそ、まさしく静高のスクール・アイデンティティの象徴ではないでしょうか。課題は生徒諸君がこの校訓をどれだけ自分のこととして咀嚼し自らの飛躍台とすることが出来るか、ということです。

いたずらに過去の栄光や幻想への懐古に終ることなく、現役の生徒諸君自身の問題として、静高のスクール・アイデンティティをいかに定着させ、確立させるか、これが私たち教職員の大きな課題であり、また使命でもあります。今後のご支援ご助言をお願い申し上げます。

（二）

平成元年度から、静高では、私立大学指定推薦合格内定者を対象に卒業研究を実施し、その成果を「卒業研究論集」としてまとめております。これもまた、新しい時代に向けての静高のスクール・アイデンティティを代表するものとして、今後定着させていきたいと考えております。

この企画は、合格内定の諸君が、卒業までの期間を利用して、自分で研究テーマを決め、指導教官（本校教員）について、レポートを四百字詰原稿用紙20～50枚にまとめるというもので、大学入学後における学問研究のための助走過程の役割を果たすものとして、まだ日は浅いにもかかわらず、各方面から多大の関心を集めております。

因みに、平成二年度は十九名の諸君の力作が出揃い、各々のレポートの末尾には、指導教官の心暖まる激励のコメントも付記されています。この企画が成功するか否かは、対象となる諸君の恵まれた能力と、指導教官の熱意と自己研鑽という二点に集約されますが、幸い本校においては、この二点を共にクリアーしており、これもひとえに百十余年のすぐれた伝統と校風の賜と感謝しております。

学歴社会への関心が高まっている昨今ですが、これからは、どこの大学に入るかということと並んで、大学でなにをどう学んだかを問われる時代となることはまちがいありません。大学で専門領域を学ぶことは、一人の人間として人格形成上不可欠の営みです。

最近の大学には、自分の卒業研究のテーマを指導教官に決めてもらう学生が多いとか聞きますが、そんな主体性の乏しい青年に、わが人類の二十一世紀を託すわけにはいきません。かつての京大入学式で、学長が「稚心を去れ」という式辞を述べられたと聞いておりますが、近年、青年の精神面での幼児化は著しいものがあります。

こうした状況の中で、この卒業研究が、出来ばえもさることながら、静高生諸君にとって、精神的モラトリアムからの決別の契機ともなればと期待しているところであります。

（三）

学校の果たすべき役割や使命は、学校のもつ歴史や伝統、更には地域の期待などの中で、徐々に明確になってくるものと考えます。

従って、学校によって果たすべき役割や使命が異なるのは、当然のことです。

古来、中国には、統治の形態として覇道、王道という二つのスタイルがあります。いうまでもなく、前者は力による統治を、後者は徳による統治を、それぞれ特徴としております。静高の進むべき道をあえて譬喩的、象徴的に表現すれば、後者を至当と考えますがいかがでしょうか。諸兄姉の忌憚のないご意見を賜われば幸いです。

同期会など

四九期

本年度の総会は去る九月二十九日、藤枝エミナース（静岡国民年金健康センター）で開催された。

台風も過ぎて霊峰富士を東に、駿河湾伊豆半島を南に眺望する藤枝の駿河台に、豊かな自然にかこまれたエミナースは心安らぐ快適地であった。

顔を合せた者、総勢二十一名、内東京から六名、関西から三名（内夫人一名）であった。

原木代表幹事から挨拶があり、篠田俊一君の乾盃で宴は始められた。

昨年は台風のため新幹線が不通となり、東京からは曽根と直原だけが台風のすきを突いて強行参加したが、本年度は多数参加出来

た。

懐しい想い出話と共に、自分の健康の話やら、他人の病状やらで話は次から次へと進んだ。

流石に出席者は揃って元気一杯で、話もはずみ酒も入った。

出席者は地元から上田（栄）、大塚、渥美、風間、沢野、清水、杉山（熊）、杉山（佐）、塚本、戸塚、原木、寺尾（義）。

東京から加藤（馨）、直原、篠田、嶋、曽根、菅沼。

名古屋から松原、大阪から風早及び同夫人。

終宴の後は、幹事室に集まり、風間の独り舞台で夜の更けるのを忘れた。

なお、この一年あまりで関東地区で、亡くなられたのは、

江山秀明（平2・8・24）
上杉一郎（平2・12・3）
矢崎宗男（平3・1・5）
安本　久（平3・7・8）

の四名である。深くご冥福をお祈りする次第である。

我々の期も七十五歳のラインを越える者がほとんどである。

あとひとふん張りして、後につづく者を信じて、二十一世紀を迎えようではありませんか。

（菅沼　栄）

五五期

平成三年度の関東五十五期会が十月二十五日午後六時から、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

昭和五十年四月二日に「山宮」で初めて五十五期会が開催されてから、早くも十六年の歳月が過ぎた。当日の出席者十一名のうち、今田　稔、高橋恒三、山本　武の三君が既に故人となっている。

祝い事は数え年で早めにするから、同期の諸君の中にはもう古希の祝いを済ませた人もいる。お互い「古希」といわれる年ごろになれば、あちらこちらに故障が起きてくるもので、今年は、欠席の通知とともに、体調が思わしくないことを知らせて来た人も少なくない。また、出席はしていても、小生のように「病気と仲良く」暮らしているものもいるのである。

ところで、今年の五十五期会は出席者十名、話がはずんで、九時近くまで賑やかに歓談した。

一見、平坦な道を順調に歩んで来たように見える人でも、よく話を聞いてみると、かなり波瀾に満ちた危ない時期を切り抜けてきている。そのような過去を淡々と話せるようになったのも、ともかく生きて古希を迎えることができたからで、そういう話を聞けるのも同期の会の楽しみというものであろう。

今回の出席者は次のとおり。

相川富士雄、小澤忠樹、辻　弘、木村康宏、宗　四朗、武井富夫、長澤栄一、中田千束、法月重雄、日比光明。

（相川富士雄）

六四期

本年も七月五日に、年一回の同期会を、新橋「新橋亭」にて開催した。久し振りに狩野達彦君、時田勝博君、望月康逸君、大村達郎君が出席し、静商の大原君、静岡より近藤昭蔵、山下啓也両君も顔を見せ、三〇名の盛会となった。

母校のマーク入りの小饅頭と「黒はんぺん」をわざわざ持参して下さり、早速その場で舌鼓みをうち、故郷への想いを深くした。一人一人近況を披露し、時の経つのを忘れて歓談した。

出席者…前記のほか、新井彰、岩本吉雄、神谷武男、加藤満、栗田行雄、佐野旭、塚本光彦、永田進一、長島健、名波倉四郎、長谷川直和、益頭尚文、増田政雄、増田誠男、山本光夫、村上喜代二、渡辺素夫、吉井駿亮。

◎秋のゴルフ大会

雨続きで開催が危ぶまれたが、十月十日の伊豆は曇天で時々薄日もさしてきた。ただ台風接近のためか、帽子も吹き飛ばされそうな強風下でのコンペとなった。名波君も久し振りに来場して皆とあいさつを交した。

十年前に伊豆大仁CCで第一回大会を、東京・静岡合同ではじめてから、今秋が第十三回となったが、参加者が年々増えて盛んになってきたことは大変喜ばしい限りである。この間いつもお世話を頂いている66期の安田正弥君のご好意には深く感謝している次第。

強風のため好スコアは出なかったが、地主の野沢が優勝、二位は稲森照男君、三位新井彰君、BB

総合広告代理店
株式会社　アドプロ
代表取締役　朝比奈 正 三（67期）
東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03-3254-2171(代表)

新東京印刷株式会社
代表取締役　梶 原 由 三（67期）
東京都中央区八丁堀2-1-7 神鋼ビル
TEL 03-3553-8981(代表)

岩本吉雄君、メーカーは幹事で疲れた石原良昭君。腰痛を押して出席した浅井幹夫君や、渡辺宏一、風間政彦、伊藤剛、佐野旭、村上喜代二、神谷武男、永田進一、渡辺素夫、山本和彦君等が参加し、来春の再会を約して幕を閉じた。

なお今迄音信不通だった旧鈴木一豪、現村上君より便りがあり、埼玉県飯能市に転居されたとのこと、阿部修治君からも毎年梅雨時は体調が悪いが、八月なら出席出来そうとの便りをもらった。また明年も沢山の友と一緒に遊びたいと念願している。（野沢正憲）

六七期

卒業四十周年記念同期会

四十年ぶりに顔を合わせて「やあ、昔のままだなあ」と感心する友。「おや、これはだれか」と変化に驚かされる友。同じように還暦に近い年輪を刻み込んだ男たちの顔がそれぞれ独自の雰囲気をただよわせ、微妙に反応しあうおもしろさ。

九月二十八日午後六時七分、静中・静高六十七期の卒業四十周年記念同期会は紺屋町の中島屋グランドホテルで開幕した瞬間から大いに盛り上がった。

サンフランシスコから飛んできた杉山恒夫君をはじめ全国から駆けつけた仲間は百二十七人。恩師の今井吉久、大村政夫、北川巻平、杉山一与、鈴木敞夫、平岩二三夫、三浦朝治、村上春水、村松寿三郎、八十島実、湯原誠、渡辺福太郎、渡辺藤男各先生に、石田徳行母校校長、鈴木与平同窓会会長も参加いただいた大集会は、山川静夫君の司会、鈴木大八郎君のエレクトーン伴奏でなめらかに、華やかに、楽しさいっぱいで進行した。

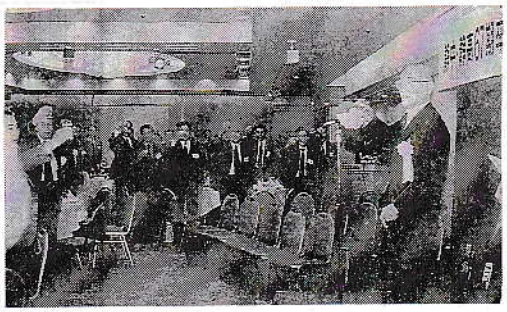
実行委員会が一年がかりで練り上げた式次第のハイライトは表彰式だった。中学三年当時のクラス別に出席者全員の名前を呼び上げ、壇上に並ばせて、代表に石田校長から「人生優等賞」を手渡すという趣向。校章を大きく浮き上がらせた望月政男君特製のみごとな木彫賞牌が「六十七期を愛し続け…堂々たる人生を歩んで優秀な成績をおさめた」との賞状を添えて全員に贈られ、一同ニコニコ。

出席者全員を主役に、という実行委の配慮と同時に、百二十七人もの顔と名前を短時間に紹介してしまうスマートな議事進行の知恵にも感嘆した。

山川君が二十八人にのぼる物故者の名を読んで追悼の辞を述べ、恩師で先輩でもある北川先生の祝辞をいただき、鈴木会長の音頭で乾杯して食事と歓談に移った。せっかくの料理にも落着いて箸を動かす姿は少なく、杯を手にテーブルからテーブルへと渡り歩き、至るところでにぎやかに話の花が咲いた。

その合い間にクラス毎の記念撮影もすませ、後半の呼び物は「懐かしき六年をふりかえろう」のスライド上映。法月郁雄君の選定した名画面、珍写真の数々が山川君の活弁、鈴木君のBGM付きで次々に披露され会場は大いにわいた。

中でも圧巻は、中学二年当時の一九四六年六月十七日、住友仮校舎に昭和天皇を迎えた際の一シー



富士通電子デバイス特約店・OA機器販社
東海デバイス株式会社
（旧社名　東海電気工業株式会社）
代表取締役社長　清水照彦（61期）
本社　東京都目黒区目黒4-6-33
TEL03-3791-1181㈹　FAX03-3715-1558

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック
熱函病院（ねつかん）
院長　小坂博（67期）
住所　熱海市春日町12－2
TEL 0557-83－3131

国際線航空貨物・海外旅客取扱い
運輸大臣登録旅行業代理店業3440号
㈱フジ・ワールド・エンタープライズ
代表取締役　中馬敏雄（70期）
〒105 東京都港区浜松町2-8-9 春原浜松町ビル
貨物電話　3434－0591（代）
旅客電話　3437－5861（代）
FAX　3434－5537

ンだった。天皇の直前一メートルばかり、文字通りの至近距離でご下問を受けた海野定也、山川静夫、石間充助、柘植悟ら諸兄の緊張しきったいがぐり頭が並び、担任の村松先生もこわいほどの顔だ。静岡新聞出版局長の光木徹君が同社の出版物から選び出してきた貴重な写真で、われわれの青春は昭和という動乱の時代の一コマであったことを端的に思い出させてくれた。

二時間三十分の楽しい時間はたちまちに過ぎ、校歌斉唱で締めくくった一同は、賞牌と光木君編集の豪華な記念写真「ああづら　こうづら」を収めた大きな袋を抱えて二次会場へと流れて行った。

実行委員長の増田智一君は「会は大成功。みなに喜んでもらってほっとした。光木、望月、法月、吉沢清治（会計担当）など諸兄が分担した仕事を責任をもってやってくれたおかげだ。六十七期の仲間の力を改めて感じた」と語ったが、全く異議なし。参会者一同も感謝、感激でいっぱいです。

（福原守一）

回想・随感・近況など

癌との取り組み

43期　吉江　誠一

私は一昨平成元年五月末、健康診断の結果図らずも胃癌の徴候を宣告され、びっくり仰天。直ちに入院、約十日間各種の検査を経た上、胃の三分の二を切除、約二週間で退院した。

爾後通院によって予後の検診を受けながら食事も体調も順調に回復の途を辿り、退院三か月後には主治医に内緒でゴルフを一ラウンド楽しむなど、自他ともに驚くほどの意外な早さで復調を見つつある。約二年半を経た現在、あらゆる検査の結果から見て他への転移もなく、一〇〇%の除去に成功したと見てよい。

今日、わが国での死亡原因の第一を占め、不治の病といわれる癌を、どうしてこうも順調に克服できたかを省みると、そこにはいろいろの好運もあり、また平素の健康状態の良かったことも幸いしたには違いないが、最大の要因は何といっても早期発見以外の何ものでもない。

私は昭和二十年八月六日の原爆投下の翌々日、軍の有末調査団の一員として広島に入り、炎天下の調査に当った関係上、後日、放射能の影響を案じての他からの忠告もあって被爆者手帳を手に入れることとしたのであった。

東京都はこの手帳保持者に対し、健康維持のためいろいろの恩典を設けて来たが、昭和六十三年からは新たに癌専門の無料検診を始めることとなり、その案内を送って来た。

もともと私としては自分自身の健康の快調さから、これらの恩典には格別関心も持たなかったが、七十八歳という年令に照らしての周囲の勧めもあって、翌六十四年（平成元年）春、指定の「がん検診センター」で何気なく診てもらったら思いもかけず徴候が発見され、しかもそれが悪質のものであるとの宣告にびっくりした次第であった。「この健康状態にそんなものができるはずがあるか」と医師に喰ってかかったりもしたが、事実は事実。あとで院長から「健康状態と癌とは別問題、そこが癌の怖いところである」と、こんこんと諭されたような始末であった。

体調に異常を感じてからではもう遅い。皆さんも健康のうちにこそ無駄なようでも、人間ドックなり、できれば癌について信頼できる部門を持つ病院等において専門の検診を受け、癌の徴候を早期に発見して、是非萌芽のうちに完全に除去されることを切にお奨めする次第である。

ソウル紀行

43期　西沢　純三

五月二十五日から三泊四日の日程でソウル訪問の旅をした。日韓議員連盟結成十周年記念行事の一つとして、また、東京とソウルが姉妹都市関係にあるので日韓親善ゲートボール大会が開かれた。東京都から百六十名、その内品川区からは三十名が参加した。

かつては関釜連絡船だけでも海上八時間の旅であったが、成田から金浦空港までは僅か二時間の旅であった。

私の兄の仙台時代の教え子であった明泰鈺君が現在ソウル在住で、これまでに度々来日されており訪韓を勧められていたのでこの機会に尋ねることにした。

昭和六年の春、旅順工大予科生時代に朝鮮経由で旅順へ帰る時以来六十年振りの旅であった。

金浦空港では大韓老人会代表の出迎えを受け、私も明君と再会を果たすことができた。

最初に朝鮮戦争の戦没者をまつる国立墓地を参拝した。正門・記念碑・礼拝堂も立派で手入れも充分に行われていた。広大な墓地には二十万人の犠牲者が葬られている由である。

現在のソウル特別市は人口一千万人で昔の面影はなく、江南地区にはオリンピック競技場・オリンピック公園・ソウル大学・オフィス・数多の高層アパート等があ

平和の橋公園
望拝塔前にて

り、最近「ロッテワールド」がオープンした。

地下鉄は四線が縦横に通じており、中央のショッピングセンターの駅に入ってみたが、深さが相当あり、防空壕の感がしたが、駅内の照明や設備は見事であった。

景福宮内に入って、国宝の敬天寺十層石塔勤政殿・慶会楼・香遠亭等を見学した。

日清戦争の直後朝鮮王朝の大院君も失脚し幽閉されていたが、その王妃であった閔妃がその子の李朝最後の皇帝高宗を立て親露反日政策をとっていたが、日本人の暴徒によって景福宮内の乾清宮で殺害された上、鹿園で火葬にされたが未だに真相は謎である。その碑がある由であったが見られなかった。

第二日は日韓親善GB大会当日だがソウルは三カ月ぶりの恵みの雨で鐘路区新門路にある恵熙宮競技場に行ったが雨天の為開会式も省略され、競技も短縮されて二回戦までの戦績で決められた。東京の葛飾区Aチームが優勝して日韓議員連盟杯を獲得した。ソウルの各チームの腕前も相当なものであった。

我々参加者全員にはソウル特別市長より寄贈の記念銅メダルが授与された。

当夜はホテルの大宴会場で親善大パーティーが日韓洋の国際式バイキングで開かれた。

第三日はオプショナルツアーで私は板門店を予定していたが残念ながら当日は南北会談が開かれ訪問は不許可となり、途中の「平和の橋」までとなり、警備兵が多数で厳重にパトロールしていた。

この公園の最北端には望拝壇が設けられており、北方を望遠できた。この地点から北方を撮影することは禁止で、東・西方向から多少北方を取り入れて付近の田園風景を撮ってきた。その他レストラン・記念展示館・多数の記念碑があり、北鮮からの戦利品の戦車・戦闘機・ミサイル砲等が展示されていた。記念展示館には板門店の模型や北鮮の産物や情勢が色々展示されていた。

特に北鮮軍が秘密裡に掘った地下七十三メートルの南侵第三トンネルの発見・軍事停戦委員会本会議場・帰らざる橋などの説明など目新しいものがあった。

終戦時まで釜山より京城・平壌を経由して半島を縦断して鴨緑江を渡って大陸まで驀進していた大型機関車と展望車が記念碑と共に陳列保存されていた。多分私も乗ったことのある昔の「ひかり」号用のSLではないかと懐かしい思いであった。

ソウルから平和の橋まで往復した国道の要所要所には特殊の堅牢な門が十三箇所設けられていた。万一北朝鮮軍の南進の場合、その戦車防衛の関門の由であった。ガイド嬢の北に対する発言もすこぶる懐疑的であり南北統一も金日成の時代では不可能と感じた。

六十年振りのソウル訪問であったが、昔に較べると今ではまるで近い隣国で円貨も自由に使え、日本語も殆ど通じるので国内旅行と変わりない感じであった。明泰鉉君が度々来日されるのも宜べなる哉である。

静岡の万葉を歩く（その三）

51期　原崎　郁平

安倍川の西岸、丸子一丁目（旧佐渡）に次の万葉歌碑がある。

さわたりの手児（てご）に
い行き逢い　赤駒が
あがきを速み（はやみ）
言問はずこぬ

（巻一四－三五四〇）

全文が白文で西本願寺本の書体を転写しており、昭和五十七年三月に建てられている。高さ約二米、幅約九十センチメートルの褐色の石碑である。歌の大意は、

「佐渡に住む美しい少女と道で行きあったが、私の乗っている赤馬の足が速いので、ろくに言葉も交わさずに来てしまった」

白文の下方に長方形の黒磨石（六三×四六センチメートル）を嵌め込み、白く浮き出るように読み下し文と口語訳が刻まれている。更にその左に次の文章が刻まれている。

『この歌は、わが国最古の歌集「万葉集」に収められ東国農民に愛唱された歌謡である。「佐渡」はその頃からのこの辺の地名で、その歴史は誠に古い。昭和五十二年、丸子一丁目と改称され、「佐渡」という地名が地図の上から永久に姿を消すこととなったことを惜しみ、地元町民とともにこの碑を建てる。昭和五十七年三月　さわたりの名を惜しむ会代表　春田鉄雄　同発起人代表　文学博士　南　信一』

この歌碑へ行くには、静岡駅の方から駿河大橋を渡り、約千三百メートル程行って、静岡市佐渡と書いた陸橋をくぐる。道は二手に分かれ、右が新東海道、左が旧東海道で、左を百メートル足らず行くと左側の奥に佐渡公民館があり、その手前左側に歌碑が立っている（道路に万葉歌碑入口の標識がある）。

丸子には度々行ったことが思い出される。その一つが徳願寺である。駿河大橋の上流に架かっているなつかしい安倍川橋を渡り右手を行くと徳願寺への道がある。寺まで登って東を見ると晴れた日には静岡の街と日本平と富士山が一望できる。野外演習の際にこの山の麓の蜜柑畑に入り込み、無断で蜜柑を頬ばったことがある（畑の持ち主さん、ご免なさい）。

丸子の味はとろろ汁だ。丁子屋で久し振りに食べたとろろ飯の美味しかったこと。麦飯にとろろ汁と葱の混ざった味がいつまでも忘れられない。この店で印象に残ることは、注文してから出されるまでの時間の長いことだ。いい加減にお腹が空いた頃に出されるから余計に美味しい。

丸子の奥に柴屋寺がある。吐月峰で有名なので、行って見ると成程、竹藪と家屋と後の山がセットになって絵のようだ。柴屋寺の前を通り過ぎて更に行くと、観昌院という寺があり、その先の坂が観昌院坂である。かなり急な坂だが、途中で振り返ると眺めがよい。行軍のコースになっていたが、通っ

たのは暑い日だったので、ひどく喉が渇いた記憶がある。坂の先は峠で、それを下ると牧ヶ谷の部落に出る。目の前が藁科川の中に立つ木枯の森だ。今は近くを静清バイパスが通り、藁科川橋が架かっている。

東海道の丸子の先を右に入った所に誓願寺という古い寺がある（静清バイパスのインターチェンジの少し先に誓願寺入口の標識がある）。ここに戦国の武将、片桐且元の墓のあることは余り知られていない。元和元年五月（一六一五年）大坂夏の陣の最中、例の国家安康事件で弁明のために駿河に来た片桐且元が、目的を果たさずに大坂落城の二十日後に京都で淋しく病死した。且元は、駿河にいる間この寺に滞在していたらしく、その縁によってか、この寺に夫婦の墓がある（享年六十歳）。一説に駿河で自刃したと聞いたので歴史書で調べたがはっきりしない。

雑　感

54期　庵原　悌次

10月13日(日)、菩提寺で行われる〃お会式〃への参加と、先祖の墓参を兼ね、妻と遠州川尻へ旅をした。

東京から〃ひかり〃に乗り、十時に静岡へ着いたが、バスの出発時間まで小一時間あったので、昼食をしようと駅を出た。

静岡駅も新築されてから十年経ったとみえ、十周年記念行事のポスターやチラシが貼ってある。街もすっかり近代化し、東京の繁華街と変らぬ賑やかさだ。

地下道から松坂屋へ上り、食堂に行く。窓から眺めると、駅南が一望のうちに目に入る。昔は駅南といえば淋しい所だったが、今ではびっしり家で埋まり、その家並は大谷・高松の方まで途切れるところがなかった。八幡山がその屋根の海原にぽっかり浮かんでいるように見える。眼下の静清国道も往来する車の波に覆われてしまっている。

国道の前方に日本平が見える。草薙の駅を降りて茶畑の中を山頂目指して登り、頂上で折戸湾越しの富士の景観に快哉を叫んだのも遠い昔の話。今では観光ホテルや放送局等の文化施設が立ち並び、昔の面影は残っていないようだ。

窓の左手に谷津山が見える。昔放送局のアンテナが望見できたが今はどうなっているのか。

故郷の変貌に驚きながら食事を済ませバスターミナルへ向かう。

静岡では静鉄が路線を一手に仕切っているとみえ、どのバスの車体も静鉄の文字ばかりだ。

静波サンホテルへ行くバスが便利だと聞いていたので、しばらく待っていると、やがて最新式の大型バスが来た。

私と妻の二人だけを乗せ、バスは東名に入り、西へ向かって軽快に走る。日本坂あたりが工事中だというニュースが流れていたが、別段渋滞することもなく吉田インターに着いた。

静岡は山ばかりだと思っていたが、松坂屋から眺めた静岡周辺やここら大井川デルタは、見渡すかぎりの平野である。

ところどころ養鰻用の池がある田畑の中を相良へ向かってバスは走る。これが昔、田沼街道といわれた道だろうか。近くの神戸という所に田沼の城址があるとも聞いたことがある。

吉田高校前でバスを降り、川尻にある妙法寺まで歩いて行った。

門を入ると左手に納骨堂があるので、まず先祖の墓参りをした。

父は信心深い人だったので、師の意向に沿って同門の人と勧進して寺を興こした。その寺に眠っているのだから幸せなことだ。

本堂に上ると静岡の長兄（父親譲りの壇徒総代をしている）が居て、積もる話に時を過ごしていると、やがて僧侶が揃い読経が始まった。

開経偈から方便品、神力品、寿量品と唱え、題目の合唱で式が終了。休憩後、布教師である近隣の寺の住職が講話を一時間ほどしたところで今日一日の行事が終る。

帰りも静鉄のバスで新静岡（昔の鷹匠町）まで帰った。この近くに伴野英資君の家があったことを覚えている。清水へ行く電車の駅は鷹匠町の次が台所町で次が音羽町だった。音羽町に足立寿君の家があってよく遊びに行った。二人とも、すでに故人である。

鷹匠町から紺屋町の方へと歩いて行った。右手のもと農業会の建物が取り壊されていたが、何になるのだろう。紺屋町・呉服町の通りは日曜日のこととて歩行者天国で賑わっていた。

服部で黒はんぺんを買う。屋台のおでん屋を思い出し、フライにして食べるつもりだ。

呉服町にも以前、割烹旅館とか洋服屋などもあったが、時代の流れかショッピング街一色に変ってしまった。

静岡駅の中は名店街というか土産物屋がいっぱいで、あれも欲しい、これも買おうとなると財布をすぐにはたかなければならない。

帰りも〃ひかり〃で帰ったので東京まで一時間。便利になった反面、四、五時間かかったSL時代の頃が思い出されて、郷愁とが入交り複雑な気持だ。

東海道線も今やローカル線化して、湘南型電車が熱海・豊橋間あたりを往復している。淋しい限りだ。

みんなも、たまには静岡へ行って、変った静岡を見るのもいいと思うよ。そして、昔行った浅間神社・臨済寺・鯨が池・吐月峰・大崩など最近の様子を会報に紹介してくれないか。

私本風土記

55期　日比　光明

昭和十年七月一日静岡市に直下型地震が発生した。大谷地震として記録に残っている。当時私は南町に住んで居り、その年静中入学で買ってもらった机の下にもぐって難をのがれた。家族も無事だったが家屋の一部台所、浴室あたりが大きく傾いた。

その頃は地震国として驚くに当らないと思っていたが、今考える

とこれは静岡地方の大きな特徴である事が判る。海底の太平洋プレートとフィリピン海プレートがこの辺りで重なり、伊豆半島を挟んで相模トラフと駿河トラフを形成する。本州を真二つに切る糸魚川静岡構造線も通っている。岳南健児の誇る富士山がここにあるのも故なきにあらず。

ところで富士山の祭神コノハナサクヤヒメは嫉妬心が強いので、富士山の見える地方では美人は生まれないという言い伝えがある。この失礼ともいえる伝説はどう解釈したらよいだろうか。

ヤマトタケルノミコト東征の途次まつろわぬ輩に襲われたのが焼津であるといい、草薙だといい、又いまの神奈川県だともいい、そもそもヤマトタケルが伝説中の人物だから漠然としている訳だが、もともと焼討ちをかけられた話だから火のない所に煙は立たぬの道理、それらしき事件はあったに違いない。静岡地方には都とはやや系統の違う土着民が居たのではなかろうか。それがいまのアイヌの祖先筋か南方系だったか判らない。

羽衣伝説も全国に数多くあるが、舞台背景としては三保の松原がぴったりだから何時の頃か漂着した海洋民族が静岡地方に居ついていたかも知れない。いずれにしても当時の中央政権は大陸から移動した系統が主体となっていたはずだから美人の規準が違う。いわゆる京美人の系譜はむしろ裏日本を北上し秋田などに繋がっている。東海関東方面はアズマエビスとしてピリカメノコの系統だったかも知れない。閉鎖的な当時の社会としてはエキゾチックな美人など理解できなかったのではなかろうか。

さて、話は戻るが南町のわが家は昭和三年新築したもので、静岡駅南方数百メートルの場所であるが当時は安倍郡豊田村といった。一面水田の中の蓮沼を埋め立てたもので、アスを運ぶ荷車が延々と続いた。

アスとはその後ash（石炭殻）のことと判った。埋立後松丸太を打込んだのだが当時は工事現場でよく見かけたヨイトマケである。農家の主婦達七、八名が円陣になり、綱を引いてモンケン（鉄錘）で杭を打ち込む。小学校へ上る前の私は紺絣りの筒袖を着てぼんやり眺めているのであるが、これをヨイトマケの労働唄でからかうのである。〃坊ちゃん判るかエーンヤコラ〃などの合いの手でドッと笑い声が入るのだから多分に鄙猥な歌だったろう。記録できていれば民俗学的に意味があったかも知れない。井戸は地下の岩盤層を打抜いたもので被圧水が自噴し、ポンプなしでも必要な所へ給水できた。夏冷たく冬温かく、そのうえ水質が良かったから自慢の種であったが、大谷地震以来水量が減り、結局水道に切替えることになった。

地震では家屋の一部被害ですんだが、昭和十五年一月十五日の大火では全焼した。昭和二十年六月十九日の空襲では家屋全焼どころか家族も爆死した。当時私は軍隊に居て生き残ったが、奇しくも五年毎に三回続いた災難で一切を失った。それ以来静岡から離れて現在に至っている。

私が住んでいた頃の駅南は一面水田ばかりで、一里先の高松の海岸まで見通すことができた。嵐の日は浜の松林に当る風の音が聞こえたものである。そして今、これらの風景は生き残った人達の脳裡にあるのみである。

サッカーと国語の授業

60期　萩原荘太郎

第二次大戦まで日本では、サッカーと呼ばず蹴球と呼んでいた。学校のクラブは、サッカー部ではなく蹴球部であった。今では戦前育ちの私でも蹴球でなくサッカーの呼び名が自然に口に出てくる。

我々の頃に較べ近頃の中学生、高校生の上手なこと、我々とは格段の違いであり、昔の私などとても足元にも及ばない。サッカー人口も増えたのでサッカー王国静岡県の県大会への参加校は、今どのくらいか一寸見当がつかない。五十校を超えている？　大戦までは西から浜松一中、見附中、志太中、それに静岡中の四校であった。一回戦が準決勝である。

昭和十五年、私が一年生の時、静中は県大会に優勝、神宮大会（現在のインターハイか？）へ出場した。当時、蹴球部長はモッチーこと国語の望月先生であった。県大会が終り最初の国語の授業、モッチーは大ニコニコで自然に静中優勝の試合の話が口から出始め、国語の授業はサッカーの講談となった。モッチーも大ニコニコだったが私達生徒も初めてのサッカー講談の国語の授業に大ニコニコであったことは言うまでもない。これで刺戟されたミーハーの私は、二年生から蹴球部に入ったのである。そして昭和十七年の県大会（これが実質的には、戦前の最後の県大会となった）、一回戦の相手は優勝候補の志太中だ。

当時は藤枝が静岡県のサッカーどころであり、志太中（現、藤枝東）は常に優勝候補であった。当然、試合前の予想は圧倒的に志太中有利であった。しかしながら静中が勝ってしまった。十一人の選手を揃えるのがやっとだった当時の蹴球部では、三年生でヤセでチビの私でもFWセンターに起用せざるを得なかった。

会場は、当時の静岡の中等学校の生徒達の勤労奉仕により造られた草薙の芝生のグラウンドであった。前後半のどちらだったか忘れたが静中はレフトのコーナーキックを得た。キッカーは渡辺主将だったように思う。浅いコーナーボールが飛んできた。敵のフルバックとせり合いながら私は夢中でバックヘッド（実はヘッディングがたまたまうまく後ろへ飛んだのだ）、これを名手鈴木吉明君がゴールへ蹴り込み、一点先取、この一点を守り切り、静中は番狂わせの勝利を得た。決勝は残念ながら浜松一中に負けてしまったが…。

大会後の初の国語の授業、皆が「蹴球」「蹴球」と小声で呼び掛けると、「何んだ？」「何事だ？」

などと初めはとぼけていたモッチーも、優勝候補志太中を倒して気をよくしていたこともあり、ニコニコと試合経過を語り始めた。得点シーンになると、モッチーは私を呼び、「萩原、お前が入れたのだったか?」などと私を持ち上げてくれた。すっかり嬉しくなっていた私は、「いえ、バックヘッドしたのです」教室は爆笑、私の答え方が可笑しかったのか、バックヘッドという言葉が面白かったのか、大笑いだった。以来、私には「バックヘッド」のあだ名が付いてしまった。

約五十年前の静中の、武道場に最も近い、一階の古ぼけた木造教室での出来事を思い出しながら……。

いのちなりけり

61期　稲森　慎二

この春、年の功で会長ということになっている近くの井の頭公園のジョギングの会の花見が終り、また今年の花見が出来たと思いつつ、酔いのさめぬまま夕暮の池の周りを一人歩いていた。

散り来る花吹雪の中で立ちどまって桜の大樹を仰ぎ見ていると、フトこの下の句が頭をかすめた。

「いのちなりけり小夜の中山」

そして遥か昔、同じようにこうして桜を仰ぎ見たことがあったはずだと思った。夏が過ぎ秋も深まりゆくこの頃になっても、折にふれてこの下の句が口に浮ぶ。その時その時の今が大事と生きて来てしまった私が、六十三歳になっての遅まきながらの自覚だろうか。

さてこの歌は、当時静岡中学の三年だったと思うが、松永先生の太平記、有名な「落花の雪にふみ迷う……」に始る俊基卿の東下りの一節に、蔦の細道とともに出て来る郷土の史蹟、金谷の小夜の中山を詠った西行の歌である。

年たけて又越ゆべしと思いきや
いのちなりけり小夜の中山

この歌は十五、六歳の少年には〝いのちなりけり〟とは何と仰々しいと思ったものだが、その後戦争の激化とともに、二度と生きて帰れぬといった発想や実感の中に青春の一時期を送った私達にとって、妙に私の心の中に残り続けたのかも知れない。

私はいまも時々山登りを続けている。そして汗水たらして山の頂に立ち、さて下山となった時、もう二度とここに来ることはないだろうと思うことに気づく。だが可能性の限界を感じながらも、いけないいけない、立ちどまってはいけない、まだまだ前を向いて歩けと呼びかけている自分もそこにある。

年甲斐もなく背伸びした人生と人はいうかも知れないが、年寄りが年を意識した生き方に専念しようとすると、ますます生きにくくみじめな生き方になるのが今の世の中だと私は思う。最初に年の功といったが、年令・職業・性別に関係なくバラエティーに富んだ地域社会の今を生きている人々と日曜ごとのジョギングの後、お茶を飲みながらする談論風発の中に、今生きている実感の一つを感じる。

だがである。年は公平に過ぎ去って行く。〝年たけて〟である。私の桜の大樹は、ある夕暮の賤機山の満開の桜であった。私はその時はじめて桜の花の美しさを知ったと思う。その若き日が今年の井の頭の桜としてよみがえった。私もここまで来てしまったのだという、なつかしいような、淋しいような気持は覆いかくすべくもない。

ところで小夜の中山は、小学生の頃、何かの折に父に連れてゆかれた。夜泣石の伝説の石は大きな何の変哲もない丸い石だった。名物の夜泣飴は経木で出来た丸い入れ物に入っていて、食べ慣れた市中の水飴より固めでおいしかった。蓋の上には稚拙な絵で、都の女と盗賊と丸い石が描かれていた。

その小夜の中山には、その時限りで、私はまだ訪ねていない。

数学と私
——ICM90を振り返って

88期　山野　武尚

第21回国際数学者会議が平成2年8月、京都の国立京都国際会館で開かれたので参加した。

日本注目の森重文さんのフィールズ賞受賞及び講演を、日程の関係で聞けなかったのは残念である。ICM90については、「数学セミナー」「数学」「応用数理」等に専門家の記載があるので、ここではその事については割愛し、印象を述べようと思う。

そもそもICMに参加しようと思ったのは、元京大数理解析研究所所長（現東京電機大学教授）であった一松信先生の「数学セミナー」記載——第20回国際数学者会議——によってである。

その中で一松先生は、バークリーで行なわれたICMについて詳細に書かれていた。これが開催されたのは86年であるから、京都でICMが開催されることが決定されて参加する迄の4年間は、胸をわくわくさせていた事になる。

実はここ国立京都国際会館には昭和43年6月の修学旅行（中学）の時に見学したことがあった。

22年経って、実際にここ国立京都国際会館で催されるものを聞こうとは、あの中学3年の時に思ったであろうか。したがって、私は最初に足を踏み入れ、メーンホールのスクリーンに映し出される講演を見た時は、ひとしお感慨深かった。

一松先生は、会議が始まる二か月前、フランス語やドイツ語で講演が行なわれるかも知れないとおっしゃっていたので、内心びくびくしていたがそれでも英語だけだったので楽だった。

しかし、中学校から習ってきた英語はあまり役に立たない、公用語としての英語の勉強が必要だと痛感した。

「数学セミナー」等では、数理物理学が特徴であったと印象記に書かれているものもあるが、私は調和解析の講演を中心に聞いた。

講演の内容はここでは割愛するが、この時、国際会議、中でも世界の一流の数学者の講演を日本で

聞けること自体に、満足感を覚えていた。一方、家族で参加している人のために数多くの催しが並行して開かれていた。中でも青い目をした小さな女の子が、折り鶴をうれしそうにもっていたのはとても印象的であった。国際的な催しの開かれていることが、このシーンから感じられることが、ひしひしとわかった。

京都での国際会議のあと、分科会というものがこの会議以後一週間位、全国各地で開かれた。

次に、私は名古屋でのポテンシャル論国際会議に出席することになる。ICM90を申し込む時、私はこのポテンシャル論の会議に参加する意思はなかったが、恩師に「委員をしているから、ぜひ」と勧められ、参加する事になった。学習院大学の大津賀先生が委員長をされていた。

私の参加日程は、8月31日から9月3日まで。もっともポテンシャル論（函数論の一分野）の講演の方は、ICMに比べると、断然易しかった。こちらの方がかえっておもしろかった。

9月2日の日曜日は、午前中講演、午後は名古屋遊覧、夜ディナーの日程であった。私は東京へ出て来る前、大学を卒業してから約二年間、名古屋の公立高校で教員生活を送っていたので、名古屋遊覧に期待をかけていた。名古屋城と徳川美術館だった。名古屋城を見た後、名古屋城の絵葉書に、サインをしてもらって得意そうにしている外国の数学者（議長をしたので知っている）は印象的であった。遊覧とディナーは日本IBMの後援によってなされた。

京都と名古屋で、偶然居合わせたスウェーデンの女流数学者がいた。黒い服だったので覚えているが、私は「女性の数学者は好きです。京都で会いましたね。函数論を教えていますか。」と聞くと、「そうです。」という返事が返ってきた。更に「教授ですか。」と聞くと、「いえ、講師です。」と答えた。

「数学と私」と題して書いてきたが、数学についての所感は何一つ述べなかった。しかし解析学、中でも偏微分方程式に強い関心を持っている。初め高校教員として出発したが、計算機を扱う職種に転向した。原子炉の解析を行なうと、偏微分方程式の中で放物型と言われる拡散方程式を扱うこととなる。

今回は、数学の中でも最高峰に位置する国際数学者会議での印象をもとに雑感を綴ってみた。機会があれば、母校卒業生の中から著名な数学者が出現するような啓蒙的な事を書いて見ようと思う。

（㈱ファスト勤務）

（註）ICM…国際数学者会議の略

INTERNATIONAL CONGRESS OF MATHEMATICIANS

秋の終わりに寄せて

90期　荒井　千明

追悼文を集めた書籍と小冊子を相次いで読む機会があった。一つは、没後二十年特集で組まれたもので、ふと入った書店にて別の本を探している時に、偶然に目にとまり、購入したものである。小冊子の方は、知人の御厚意によった。知人と故人は、親しい間柄にあったという。

故人となった二氏は、いずれも学者としての生活を何年か経験していた。狭義の意味での専門は二氏の間で異なっているが、日本の民族文化、風俗、歴史を根本で支え、それをこよなく愛していたことは相違なく、多忙な公職を退いた後の余生を、さぞや心待ちにしていたろうと思われる節もある。

御双方の誕生年から数えると、今年で六十歳と八十一歳の勘定になるから、亡くなっていなければ今現在会って話が聞けた可能性がある。勿論、追悼集が刊行される程の人であるから、こちらの希望があったところで、会って頂けたものかは判らない。

が、少なくとも声は聞いてみたかった…、動作、話す時の様子、或いは歩いている姿を、一目でいいから見てみたかった、という思いがある。

初秋から長雨が続いたからか、二氏の御存命中のエピソードに共鳴する点が多かったせいか、或いは、敬服していた二氏の追悼集を、殆んど同時期に読んだ故か、今でもよく判らないのだが、少なからず私の中に湧いてきた渇望は、このところ俄かに発酵しはじめている。

単にそういう思いにとらわれはじめる年回りなのかも知れない。

それからというもの、月に二度前後、週末を使って小さな町にでかけるようになった。

一方の故人は三十余年をその町で過ごし、敬老の日に自宅で家族や親族とくつろいで夕食を楽しんだ後、皆が帰路についた時刻前後に、脳内出血で急逝している。

別の故人は、永住することを考えて、その町に移り住み始めた矢先に、母校への復帰が決まり、間もなく単身赴任し、激動する環境に身を投じていく。常にかかる重荷を一手に背負いながら孤立していく過程で、不治の病により死去されたが、そこに至るまでの精神的病弊は、惨憺たるものである。

二氏にとって、無念の最期であったかどうかは私には判らない。しかし、その町を歩き、故人の墓参を終えて宵のうちから盃を傾けていると、故人の思いが少しだけ見えるような気がしてくる。

故人をして、憑かれたように万巻の書を読ませ、珠玉の論文・論評を書かせた源は何であったか。欺瞞と挫折だらけに見えた歴史の深淵で、時として揺らめいて見えた鎮魂の念に思いをはせたのではなかったか。それはゆったりと静止しているようでも、傍観しているだけではどこが頭でどこからが尾かも見極められぬ巨大な生物体のようなものではなかったか。

傍目には生き急いでいたとしか見えぬ生き方として、当人にしてみればのらりくらりの趣味三昧の毎日であったのかも知れないし、そういった生き方を肯定していたのなら、周囲が騒ぐほど無念の情

をも抱くことなく逝かれたのかも知れぬ。

十月下旬の墓参は、またしても驟雨に見舞われた。境内に二輪だけ咲いていた秋桜が印象的だった。

第4回印高会ゴルフコンペ

≪10月22日　武蔵松山CC：30名参加≫

優勝の栄に浴して　77期　清水雅尚

思えば一年前の秋、同窓の旧友と話をしていた時のこと。彼は何げなく「オレ、今度関東同窓会のゴルフコンペに出るんだ。コースも名門の箱根カントリーだからお前も出ないか」とのことです。

その時から大ゲサながら私の苦悩が始まりました。参加をOKしたのはいいけれど、多分立派な先輩たちばかりだろうから、みっともないプレーは出来ない。それまで出入りの激しいゴルフをしていても何も反省していなかった自分はどうしたらいいのか。せめて一〇〇チョボチョボで回って来たいと考えました。しかし練習するにしても時間もないので、出来るのは素振りだけ。これしかないと朝と帰ってからの深夜、少しずつやるようにしました。ところが参加するまでの2～3週間の緊張した素振りの練習が私のゴルフの転機となりました。それまでブンブン振り回していたものが力が抜けて、軽く振った方がいい結果が出るぞ、ヘッドの走る軌道が一定して来るぞ、と思い始めました。

初参加の第二回は悪いクセがやはり出て七位となりましたが、その時の優勝者を見て（実はこの時の優勝者も77期の松永君）、優勝盾はぜひ欲しいと思いました。

その盾の頭には金色の五角徽章が輝いていたからです。五角徽章に思いを込めた高校時代がよみがえって来るではありませんか。よし、ハンディ（28）はこのままにしてもらって一度は優勝してあの盾を欲しいと思いました。第三回は見せ場（五連続パー）も作ったのですが後半リキみ返って五位。

今回も最近昼からスコアを崩すので注意したつもりが上りで10もたたき、これでは勝つのは無理だと思ったら、何と優勝！　前回は中村先輩、今回は大石会長にこのハンディは何だと言われてしまったので、今後は二度と勝てないハンディで参加します。

所で今回の会場の武蔵松山のコースの素晴らしさ、回るにつれて良さが出て来ました。コースや景観もよかったのですが、ロングをすべて無理なくドラコンに出来るというのもそうはあるものではありません。会場と機会を設定していただいた大石会長、秘書の山崎さん、いつも感謝しております。

我々も世間では中堅以上の年令になって来ましたが、この会に来るとまだまだ鼻たれ小僧。首をすくめながら我がままを言わせていただいております。

先輩諸兄、次回以後もどうかよろしくお願い申し上げます。

（77期　清水雅尚）

兼岩正夫先生遺稿集
十二・三世紀のヨーロッパ
刊行計画中。購読希望者を募る

兼岩正夫氏（44期）は旧制静岡高校と東京教育大学で西洋史を担当されましたが、昭和五十九年に逝去されました。

此の度七周忌を迎え、先生の西洋文化史研究の成果である貴重な論文やエッセー風評論を纏めて一巻とし、筑摩書房から平成四年三月を期して刊行される予定です。

瓢々として淡白な先生の人格を反映した論説は世上の喧騒を越え、西洋文化の伝統を歴史と言語の分野の底深く沈潜して確かめ、そのエッセンスを軽やかに掬い取った極めて味わい深い労作です。

予価は六千円前後ですが、購読希望者には八掛けで頒布いたしますので、ハガキで左記までお申し出ください。代金は本と一緒に振替用紙を送りますので、本の到着次第折返し送金していただければ結構です。

尚、学術出版の経済的基盤が薄弱なおりですので記念刊行助成のご芳志をもって一口五千円の寄付を併せてしていただければ幸いです。

申込先　〒106　東京都港区南麻布二-九-十二　西澤龍生気付
「兼岩正夫教授記念刊行会」宛
郵便振替口座番号
東京3-651157　西澤龍生　宛
〔西澤氏は筑波大学教授で、兼岩正夫教授記念刊行会発起人代表

者です」

（内容の一部）「中世ヨーロッパの学問と思想」「中世社会に生きた人々」「クロヴィスの父キルデリック」「イスラム世界とヨーロッパ」「十字軍運動」「西洋古代中世の歴史思想」「十二世紀のルネサンス」「西洋中世文化の二面性」「中世歴史記述と古典的教養」「中世ラテン文学研究上の諸問題」「ゲルマン民族移動時代の歴史意識」など。

（60期　里見元一郎）

第44回江の島会…10月6日に開催

九月以降、週末になると台風や秋雨前線の影響で雨天となったが、十月六日開催された江の島会も雨にたたられた。

今年は炎暑の九月の第一日曜日をはずして、涼しくなった十月第一日曜日に、永野名誉会長（35期）が経営する恵比寿屋さんで、望月母校教頭、遠藤同窓会常任理事（45期）等の出席をえて、三十一名が集い、盛大に行われた。

総会は奥沢徹氏（59期）の司会で始まり、佐伯正剛会長（51期）が「江の島会は永野名誉会長が今年九十歳になられ、本会出席の一番若い人が90期、三代にわたる人達の交流の場は、歴史のある我々の共通項の静岡中学・静岡高校ならではの会であり、今後とも大切に運営して行きたい」と挨拶した。

引き続いて望月教頭、遠藤同窓会常任理事、甲木怜教諭（79期）から母校の現況が報告され、出席者一同、母校の活躍のありさまに聞き入った。

その中で、同窓会本部で母校創立百二十五周年記念式典のことが話題となっているとのことを聞き、あらためて母校の歴史と伝統の重みをしみじみと感じとった。

関西同窓会から出席された平山桂氏（43期）の祝辞のあと、議事に入り、事業報告、会計報告が満場一致で承認された。

引き続いて黒田秀幸氏（67期）の司会で懇親会が始まり、井出多米夫氏（42期）の音頭で校歌を斉唱し、平尾鋼之輔氏（37期）の発声で乾盃、宴に入った。

その席上、佐伯会長が調べられた「江の島と弁天様」について詳細な資料にもとづく説明があり、知っているようで知らなかった弁天様のことをあらためて勉強したというアカデミックな雰囲気も加わった。

会場では期を超えた歓談の輪があちらこちらで広がり、話はつきなかったが、再び校歌を四番まで斉唱し、再会を約して散会した。

なお、本年は例年の九月は残暑がきびしいということで、テスト的に十月第一日曜日に設定したが今後の江の島会運営のためにも、関係各位のご感見を、江の島会事務局に寄せていただければ幸いである。

（68期　雨宮明生記）

静岡だより

東海道線ローカル列車

70期　角替　弘志

東京に住んでおられると、便利になればなるほど静岡は不便になると感じられていると思います。六月末、帯広に仕事で出掛けましたが、行きは順調だったものの、帰りは飛行機が一時間ほど遅れてしまったため、新幹線の終列車に間に合わず、止むなく鈍行で帰り静岡に着いたのは翌日になってしまいました。帯広―羽田の方が東京―静岡より時間的にはずっと近いのです。こういう時には、静岡に空港があったらいいなあということをつくづく感じます。

東京や名古屋の方には静岡の駅には降りたこともないと言われる方が意外に多いのに驚くことがあります。「ひかり」に乗ってしまえば、静岡はいつも通過ですから当然かもしれません。私なども東京に行く時はいつも「ひだま」に乗りますので（静岡に止まる「ひかり」は俗にこう呼ぶのだそうです）、せっかく新富士駅ができても降りたことがないのと同じことだと思います。東京在住の同窓の方にも乗り物が便利になったものだから逆に静岡に縁遠くなった方も多いのではないでしょうか。

新幹線開通以来、東海道本線はローカル線的になりましたが、駿河シャトルが運行されてからはますますその感が強くなったように思います。

十一月には磐田―天竜川の間に「豊田」という駅が開業しますが、ここ数年の間に静岡―用宗間に「安倍川」、焼津―藤枝間に「西焼津」、藤枝―島田間に「六合」が、また沼津―原間に「片浜」という駅ができ、しかも富士―島田間では日中でも約十分おきに列車が走っているので、列車の時刻表をみて駅に行くということもなくなりました。

ただ残念なことに、「袖師」は昔のプラットホームの名残が残っているにもかかわらず復活しません。海水浴場もなくなってしまったのですから止むを得ないかもしれません。

それに清水では同期の堀田哲爾君（清水市スポーツ専門官）がプロ・サッカーチームのスタートに向けて大車輪で頑張っていますが、日本鋼管はなくなり、軽金は小さくなり、東亜燃料は名前だけで、人口も増えず寂れていくばかりです。

列車が便利になったので静岡から焼津、藤枝などに移り住んだ人も少なくありません。用宗や焼津の駅前には随分沢山マンションができました。静岡市は人口五十万を目指していますが、この分では目標の到達は無理ではないかと思います。人口が増えないのです。

静岡駅周辺に住宅付の再開発ビルを沢山作り、皆さん方にも静岡

に戻って東京に通勤してもらうようにするしか方法はないのではないかと思います。最近開業した静岡駅構内のアスティというショッピング街はしゃれていますし、七間町通りや青葉通りは面目を一新しました。県庁裏の内濠の風景も巽櫓ができて風情があります。静清バイパスはまだまだできませんが、浜松ほどではないにしても静岡の街も確実に変わってきています。社会教育の仕事をしていますので近くの町に行くことが多く東海道線のローカル列車によく乗りますが、車窓の景色も絶えず変わります。

忙中閑ありと言います。青春十八切符で静岡まで足をのばしていただくのも、楽しいことだと思います。

（静岡大学教育学部）

無念！
またも選抜を逃す

エースで四番、そして主将とくれば、高校野球では良くも悪くもワンマンチームとなる。今の静高は、投打の要である西村を中心にチームを形作っている。

ただ打撃が看板だけのチームでは、勝ち残っていけない。打撃には好不調の波が大きいからだ。むしろ、安定した投球を続けられるエースが存在するチームの方が、確実にトーナメントの頂点へと向かえる。

例外はある。昭和四十八年のチームがそれだった。植松・白鳥・水野ら大型スラッガーを擁し、打って打って打ちまくり夏の甲子園の決勝に駒を進めた。もっとも、主戦の秋本、控えの遠藤ともに、超高校級とはいえないまでもレベルは高かった

平成二年の秋季高校野球東海大会でベスト4に食い込んだ静高だったが、甲子園へは同じベスト4、しかも同じ一点差負けで決勝進出を逃した三重高が選抜された。その〝甲子園へのタッチの差〟を埋めるべく、かつての栄光を目指して背番号1を当時の望月正から成長著しい西村へ移し、打撃も強化して迎えた平成三年の秋季高校野球大会だった。

勢ぞろいした静高野球部ナイン（草薙球場にて）

地区大会を順調に勝ち抜き、中部一位で県大会に臨んだ静高は、東部一位の御殿場西とともに優勝候補に挙げられていた。

まず、緒戦で修善寺工を4－0と西村が二安打完封で下し、二回戦では、最近ぐいぐいと頭角を表して来た常葉菊川と対戦3－0から追いすがる菊川をスクイズ外しなどで3－2で振り切った。

続く準決勝は、猛打で鳴らす御殿場西との対戦。事実上の秋の県下一を決める試合と見られたが、頼みの西村が二回に早くも相手打線につかまり、大量五点を献上、結局7－4と敗れた。

しかし、東海大会へのキップは三枚。西部一位の浜松商との三位決定戦に残り一枚のキップを賭けることとなった。

静高は初回と二回に長短打を集めて4－0とリードし、終盤に追いすがる浜商をリリーフの岩淵が抑えて5－2と試合を決め、四年連続の東海大会へと駒を進めた。

さて、東海大会のトーナメント表を見て、静高ナインは心を震わせた。というのは、緒戦を勝ち抜けば二回戦で三重高と当たるからだ。昨年は直接対決がなかったとはいえ、同じ一点差での準決勝敗退でありながら、選抜へのキップを三重高に奪われた思いがナインにはあったはずだ。

何としても三重高に借りを返して甲子園へ――と、まず市岐阜商と対戦した静高は、初回に三点、三回に四点と大量得点を挙げ、二点差まで追いあげられたものの、西村－岩淵－望月正の好リレーで7－5と市岐阜商を下した。

さあ、対三重高戦。五回までは0－0の拮抗した投手戦を展開していたが、六回についに西村が崩れた。リリーフの望月正も捕まって四点を献上、最後は岩淵も投入したが、県大会優勝の三重高の強打を封じることができずに、結局九点を与え、また頼みの打線にも火がつかずに、9－0のスコアで準決勝への道を阻まれた。

（静岡県大会準決勝）

静高	1	2	1	0	0	0	0	0	4
御殿場西	0	5	0	0	1	1	0	0×	7

（静岡県大会三位決定戦）

浜商	0	0	0	0	0	0	1	1	2
静高	3	1	0	0	0	0	1	0×	5

（東海大会一回戦）

静高	3	0	4	0	0	0	0	0	7
市岐阜商	0	1	3	0	0	0	1	0	5

（東海大会二回戦）

三重高	0	0	0	0	0	4	1	0	4
静高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

中部地区大会から県大会、そし

て東海大会を振り返ってみると、確かな課題が浮き彫りにされる。

それは、西村を中心にある程度の打力があり、ある程度のピッチャーの駒も揃っていながら、一旦お互いの歯車が食い違い出すと、もろさが露呈する点だ。

たとえば、県大会の軌跡を追ってみると、修善寺工戦ではわずか二安打に抑えたかと思うと、御殿場西戦では三点を先制していながら、一挙に五点を失うほど崩れてしまう。浜商戦でも、六回までは一安打と順調に試合を進めておきながら、八回に三連続長短打を浴びるなど、極端な攻防が目立つ。

この傾向は、東海大会でも見受けられ、対市岐阜商戦では三回までに猛打で七点を奪っておきながら、後は0行進を続け、逆に三回には二安打と三フォアボールに野選をも含めて、あっという間に三点を失っている。三重高戦でも、四点を失うイニングが二回と、一挙に崩れるパターンを繰り返している。

投打とも素質があるチームだけに、このちぐはぐさは何とも惜しまれる。ある程度のレベルがあれば、ミスや気の緩みを一切排除して、能力のすべてを出し切って、甲子園でさえもしぶとく勝ち抜いてゆく浜商タイプの野球センスをも身につけてゆけば、甲子園での活躍もけっして夢ではない――とかたくなに信じているのは、四年連続でこうした悔しい思いを原稿用紙にぶつけている私のひとりよがりだろうか？

（85期　吉水　廣）

「こえ」

気軽に筆を執って
お送りください

42　中嶋　敏

財団法人東洋文庫の研究員として中国宋代史の研究を進めております。

43　望月　孟夫

平成三年度年会費をお願い致します。今のところ何とか無事に過して居ります。

43　坪　晴行

満八十歳に達した私ですが、日日元気です。既に、国立水戸病院長は退職しましたが、健康にめぐまれております。日々家庭菜園などに楽しんでおります。住所等の変更もありません。

47　星野　三郎

『写真屋監督』という本を同期の片山正二君が送ってくれたので興味深く読んだ。

静中が甲子園で優勝した時のことが、非常に名文で書かれている。著者は静中の卒業生ではないが、私達の静中のことが、また加藤さんのことがよく書かれている。一読をおすすめする。

49　直原　敏衛

毎回この次は出席する旨この欄で誓って来たのに、又々欠席のていたらく。九月末に藤枝で行われたクラス会に出席した際、菅沼氏に会い、この次は必ず出る事にする旨宣言したので、次回は大丈夫でしょう。

51　伊藤　濵吉

毎年冬になると、犬に引かれて大井川や天竜川の奥を歩いています。

52　曽根　信一

お蔭様でこの歳まで健康で現役として仕事をさせて頂っています。新幹線で静岡を通過するときには、いいしれぬ懐かしさがこみあげてきます。故郷って不思議なものですね。静岡駅附近も随分と変りましたが、全く変らないものもあります。

55　武井　富夫

東樹西風枕簟秋
楚雲湘水憶同遊
高歌一曲掩明鏡
昨日少年今白頭

60　柴田　正臣

昨年からまた新らしい会社をやることとなり毎日あわただしい日を送っております。

そんなわけで皆様にはすっかりご無沙汰してしまい申し訳ありません。

また皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

61　浅野　徹治

只今勤務の日軽アーバンビル下幹はビルのトータルリニューアルを指向している会社です。一年先輩の住友建設の才茂副社長、三年先輩、同じ西汽東通でした東急建設の川田副社長に御世話になっております。

61　君島　敏男

船会社に長い間おりましたが、昨年の株式総会で退任、現在は陸上の仕事に移りました。船から降ろされた海上コンテナをトレーラーに乗せて目的地まで運んだり、その逆に船まで運んで船積みする会社をやっております。

66　山梨　裕司

本年還暦を迎えましたが、60歳と云う実感はあまりなく、健康で未だ働ける幸せを強く感じます。

本年初め同期の親友N君が奥様ともども他界され、親友の死は、身内の不幸同様つらい涙のものです。ただただご冥福を祈るのみです。

67　朝倉　勇

日本航空国際線のファーストクラス用機内誌「Agora」（91年4月創刊）の編集に従事しています。アゴラはギリシア語でひろばという意味です。同時にジャルカード会員、グローバル会員にも郵送。76ページの月刊誌です。ご覧の方も多いと思います。ご感想をお寄せ下さい。

68　上原　七郎

静岡・クーポールでの会では三十七年ぶりに会った諸兄姉にいたく感激しました。TELを頂ければお会いいたしたく存じます。

68　神保　尚司

静岡へは中々帰るチャンスがありませんので関東同窓会に出来るだけ出席させて戴いて居ります。

68　吉崎　英輔

四年の三菱商事シンガポール支店勤務を終え八月三十日に帰国しました。又お世話になります。よろしくお願いします。

74　稲葉　一宇

我々七四期も、在京者の会合が度々開かれるようになりました。会を重ねるごとに参加者もふえて

来ます。卯高会ゴルフ等参加させて頂けるようでしたら、ぜひお声を掛けて下さい。

平成三年度会費拠出者

（順不同・敬称略）

平成3年4月1日～10月31日

四二　井出多米夫、岩波信平、国分友美、中嶋敏、吉田幸一

内田正夫、宮澤次郎(5)

四三　倉沢栄吉、西沢純三、三好由三郎、坏晴行(3)、山村忠雄、松下篤三

四四　長田寿雄、臼井茂、村井東助、増井三郎(3)

四五　草野哲、田附敏三、鈴木弥門、佐野理平、石上稔、下川猛、柏木千秋、堀正治、竹下定吉、伊藤敬三、速水基夫、松林晋一

四六　青木清明(5)、大島正雄、内山規、篠原清、西静男、山本幹夫(4)、山下正司(3)、阿部俊一、田中修三

山本敬三郎、八木鑑司

四七　杉山栄一、関口不二夫、星野三郎、吉見四郎、亀山敏男、上田次郎、今関智吉、片山正二、田中達夫、土井知恵雄、山上信重

四八　近藤希賢(3)、河村祥、太田正之、興津幸四郎(3)、大橋広世、岩崎鑑一、原崎進一、伏見賢治郎、日比野悦三、福永正美、高須寿

四九　菅沼栄、直原敏衛、篠原泰長井広、伊藤徹次郎、大津英輔、山村忠平、小林道雄梶原忠治、住太郎、梅村魁一一彦、田中誠、江川友治山田喜志夫、大庭富士夫、緑川俊徳、大庭左文、丸尾文治、峰田静夫

五〇　森弘(4)、谷川清、難波悦朗、永井五一郎、原崎郁平(4)、渡辺功、鈴木孝雄、河瀬士郎、佐伯正剛、伊藤浪吉

五一　川島喜八郎(4)、田中貞司服部雅雄、広川聡(3)、石野浩一、大草知久、茂呂茂樹、市川雄八郎、小川善次郎、綾部立一、遠藤廉、佐藤昌武、曽根信一(3)、新美弘、西田豊馬

五二　大石巌、奥野孝、小野一夫園田芳男、谷静夫、徳永悠久、橋本久仁寿、月見里得知郎、山菅章雄、桜井昌也(4)、宗像醇(4)、鈴木弘雄、片桐鎮夫、志田寿一、三枝正裕(7)、松前新太郎望月昂

五三　庵原悌次(4)、大畑忠夫、佐野圭司(3)、平林一郎、磯野修、高井昂、大藤直久篠原範平、佐野資郎、鈴木猛、居初良雄

五四　相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信(4)、野中篤、山下武男、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、松井保治、吉川鐙介、日比光明石神庸一、峰田陟(3)、辻弘

五五　青木良文、奥野進、橋本保二、山田隆、清水逸郎、佐野豊彦、萩原達雄

五六　岩井平一郎、影島利邦、杉山正友、月見里礼次郎、米沢正次、坂田秀雄、菅稔渡辺武男、加藤健三、富田澄、藤巻重男、望月修(4)、天野喜久雄、福住俊郎、鳥居義彦

五七　青山勇、奥沢徹、小花敏郎川田昭(3)、清水汪、福地邇、三輪潔、近藤陽三、湯本幸丸、富永利夫、菅原操福原元一、田沢義彦、佐野英一(4)、青木豊、狩野和男、長田宏、内田武二、伊藤光雄、寺尾宏一郎、朝比奈正二、橋爪壮、瀬端一男上杉重吉、大石隆一、笠間達男、鈴木光男、時田正康山崎鏡次、新間昌輝、柴田正臣、辻村輝彦、山路敬三渡辺博、斉木学、君島康弘山本雅之助、原田龍二、逸見昭三

六〇　奥野泰助、高村岳史、清水照彦、花見久、君島敏男(3)、西田駿之介(3)、宇都宮道和、青木邦彦(4)、大石次男、末吉晴夫、浅野徹治(3)、土井正図、鈴木孝(3)、伊藤久、稲森慎二黒川泰三、八木貞二、山崎和夫、芹沢博樹(3)、北村鎮二、坪田昭三、巻田英一

六一・六二　白鳥芳夫、川手生己也(3)、真田宗明、加藤平三郎、鈴木新之輔、柴田克朗、三枝弘之(3)、大塩幸男、伊東守、大沢三朗、吉川隆士、青木香、尾崎風伍

六四・六五　野沢正憲、新井彰、岩本吉雄、加藤満、神谷武男、栗田行雄、佐野旭、名波倉四郎、永田進一、長島健、長谷川直和、益頭尚文村上喜代二、吉井駿亮、渡辺素夫、狩野達彦、増田誠男、田中耿、蛭川博之、松下一男、渡辺宏一、山本光夫、猿谷秀雄(4)、鈴木明郎、望月康逸、時田勝博、塚本光彦、山本菊哉

六六　河守輝雄、田中俊男、増井和夫、山下智康、森山秀夫安池智策、小嶋清司、菊田聡裕、馬淵逸明、大坪信之原常勝、山梨裕司、石川剛二、大村敏夫、武藤勇、大原直樹、瀬尾章、中村伸吾三原敏、曽根錦吾、藤原隆二、馬越峻、岡田隆、村松武司、佐野栄一、永島秀次郎、村越立彦

六七　遠藤一彦、小沢皎二、大石脩而、梶原由三、川上剛二小坂博、塩沢満、中村次雄成岡英彦、福原亨一、牧田仁男、影山友安、稲葉昌弘岡村英二郎、丸山英久、長尾章、松本安子、加藤友衍朝倉勇、河口正義、児島英男、小杉謙一、山形誠、向井久和、朝比奈正三、鎌野悦雄、黒田秀幸、鱸薫明、山川静夫(6)

六八　雨宮明生、岩瀬順郊、佐野川好母、神保尚司、鈴木俊彦、高橋俊見、立花雍一、塚本浩司、野中省三、萩原多賀男、福本準一郎、星野敏郎、荒谷じつ子、大橋勝弘、中村睦、秋山和也、栗

田瑞夫、伊東良平、市原卓
額縁晃生、宇田貞子、田中
英夫、杉山忠男、八木貞夫
佐藤忠行、井口禎、河口浩
植田勇夫、鈴木満郎、武光
康之、杉山和子、望月節、
森下健(10)、丸尾敏夫、石
川堯昭、吉崎英輔、滝口芳
和、稲葉清、佐野禄朗、上
原七郎、長谷山粛、青木靖
明(10)、大川庄治

六九
神谷貞子、堀場千賀重、笠
井耕一

七〇
岩崎修、大高源之丞、清水
令一郎、関哲男、中馬敏雄
中村竜二、味岡宏、宮代省
一、小林孝光、松隈明雄、
谷川治弘、調子達郎、大長
智、松永茂、白石通子、野
田卓男、原田行造、桜井規
順、宮本達司、遠藤藤弥、
大場良臣、村上雅一、松岡
誠三郎、藤波はるみ、渡辺
勝美、山田恒男、有田久

七一
梅原孝允、矢部正和、後藤
弘枝、海野幸雄、秋田和男
佐藤利治、森川滝太郎、山
本雅司、徳田武司、石川宏
臼井力、浦田彰、実石欣哉
今村清彦、加藤祐史、小池
啓治、友田熙、村松綏啓、
石上惟啓、片山嘉博、竹井
三保子、渡辺弘、松原徳満
(4)、西野章、曽根敏美、
奥村鋭一郎、山田卓夫、本
間啓司

七二
宗野佳郎、松木茂夫、山口
公子、川端正志、前田栄一
丸山安彦、夏目雅之、岩下
方彦、深田均、山本哲也、
川端康夫、渡辺繁(3)、陰
山勇一

七三
鈴木雅子、豊田智子、鈴木
豊、宮崎禎雄、西本昇平

七四
大嶽隆司、松下晴一、佐藤
鐘司、籠宮達二郎、青木道
芳(4)、稲葉一宇、藤原経
史、小笠原隆夫、中西恭二
山本肇、中西健、石上省三
田中佐智子、木村敦、望月
徹弥、加藤恒行、西山肇、
花本栄二、山口雅子、山脇
伊久男、塚本豊、金子富雄
松永竹生、中村牧子、八木
璋

七五
後藤正義、大島崇志、鈴木
正孝、石丸信吾、遠藤安彦
今井規之、井出辰一郎

七六
三田進司

七七
加藤重信、仁科光司、深山
源一、山崎通之助、小林陽
一、岩崎敏宏、野方重人、
三浦位通、仲沢洋文、鈴木
宏治、清水雅尚、松永秀夫
磯谷計嘉、加藤雅久

七八
石塚寿子

七九
富野興、上田尚亮、熊井秀
則

八〇
山本洋一、入谷健彦、深沢
直行(3)、増田安久、小木
哲朗

八一
萩原英昭、本多英一、鈴木
義明、英嘉明、宮崎太加志

八二
八牧浩行、杉本三郎、穂積
晃子、北雄二、中村孝昭

八三
橋本幸雄

八四
田辺哲、塩谷立、榊原明生

八六
成岡和美

八七
藁科名雄、橋村芳一

八八
仁科満寿雄

九〇
小林一郎

九一
小原裕子、菅沼修

九二
服部泰子

九三
岡村幸彦、大津仁昭

九四
安本修身、岡村仁、荻田雅
宏、松野敦子、青島正剛、
佐々木美登里、照井徹、谷
口央

九五
落合直樹

九六
奥田規之、飯田知弘

九七
藤森尚

九八
天野充、岩本裕二、福間将
文、大村慎一

九九
藤原智哉、田力道代

一〇〇
芹沢正樹

一〇一
杉本文洋、伊藤禎高、山本
徳子

一〇三
高林正彦、矢田かおり

一〇四
稲葉和也、山田美和、石原
毅人、西村奈都美、八木り
ほこ、北島あかり、林秀明
海野純、原田昭博

一〇五
岡本朋子、古谷英一、円沢
卓久、八十浜修一、吉岡真
二、鈴木由美、杉山崇、土
村宣明、笹田真矢、増田知
昭

一〇六
甲木雅子、西ヶ谷政行、今
村千恵子、浅野佐織、木谷
和行、藤牧剛、桜井貴大、
鈴木めぐみ、福井彩乃、杉
本信司、横井宏重

一〇七
渡辺圭、川上智愛、吉田美
知子、小杉祥代、土屋淑美
笠井勇治、大場ゆかり、池
谷一也、杉山昌宏、渡辺将
宏、中村陽一、長島庸至、
村松美佳、鷲巣大輔、宮沢
映子、杉山大輔、加藤未起
子、池田和香菜、宮崎秀樹
松崎琴、望月文幹、清原英
里、石井あずさ、斉藤正勝
北村博和、見宮美早、加藤
大治郎、西田知崇、五十嵐
勝、川崎智哉、森川秀幸、
上田智津子

名簿補遺訂正

●自営　▲勤務先　■学生

平成3年4月1日～10月31日

61　北村　鎮二

420　静岡市緑町八―四六

61　芹沢　博樹
（五月より）

252　藤沢市湘南台一―三九―一〇

63　大塩　幸男

削除

転居先　藤枝市駿河台一―九―九

67　山形　誠

▲Marine Fisheries Research Department Southeast Asian Fisheries Development Center
（国際機関）
Changi Point Singapore 1749
Republic of Singapore

（住所変更）

67　松本　安子

171　豊島区目白四―八―四

72　渡辺　繁

272　市川市南大野一―四―二九

74　加藤　恒行

▲㈱三岩エンジニアリング
取締役　システム開発本部長
【〇四四―八一二―一〇〇一】

94　岡村　仁

299―31　千葉市小食土町（ヤサシドチョウ）一―六一―一二
あすみが丘三―七七―一四
【〇四七二―九四―九九五六】

トッパン・ムーア株式会社

宮澤次郎（42期）

東京都千代田区神田駿河台1－6
TEL（3295）2411（大代表）

鈴与株式会社

取締役会長　鈴木与平（44期）

清水市入船町11－1
Tel 0543（53）3111（大代表）
東京支社　千代田区丸の内2-3-2 郵船ビル4F
Tel 03（3284）0551（代）

株式会社 東電社

取締役社長　岩波信平（42期）

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL（3271）2701（大代表）

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1－5－1
TEL（3833）2111（大代表）

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長　奥野　孝（53期）
取締役社長　奥野　進（56期）
取締役副社長　奥野　広（58期）

本　社　東京都台東区寿2-5-12　加瀬ビル
Tel 03－3842－6831（代表）
静岡事務所　静岡市安東2-8-14
Tel 0542－46－9378

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長　奥野　孝（53期）

本社　東京都台東区東上野2-18-7　共同ビル10階
TEL 03-3834-5331（代表）

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役　奥澤　徹（59期）

本社工場　横浜市瀬谷区橋戸3－25－6　〒246
Tel 045-301-5545　FAX 045-301-5547
大和工場　大和市深見3706－1　〒242
Tel 0462-62-0340　FAX 0462-62-0343
東松山工場　東松山市大字新郷88－47　〒355
Tel 0493-24-2511　FAX 0493-24-2513

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役　岩井平一郎（57期）

本　社　静岡市国吉田645
TEL 0542(62)1111（代）
東　京　中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03(3272)4651（代）

建築設計・監理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役　成岡英彦（67期）

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル
TEL 03-3363-8604（代表）

株式会社 冨士越
株式会社 冨士越化成

代表取締役　野澤正憲（64期）

東京都渋谷区東2－14－9
TEL（3409）3342（代）
TEL（3400）9541（代）